「私にとっての保育のはじまり」

子どもたちの動きの中に
一時代の音楽を期待する

松沢孝博

演奏会へ足を運ぶ。演奏されるのは、十七世紀前後の音楽である。聴衆が席につき、舞台には演奏者達が入り、最後に指揮者が入場する。いよいよ指揮者の棒を待つのみ。指揮者は心を鎮めるかのようにしばらくうつむいている。指揮者が右手を動かした瞬間どんな音が出てくるか、この演奏者たちによってどんな音楽が奏でられるのか、期待する緊張の一瞬である。それは、各演奏者達によって音が違い、リズムが違い、音楽が違うということへの興味のみならず、音楽がみずみずしく生れだす感動への期待でもある。

指揮棒が振られ音楽が鳴りはじめる。第一バイオリン二つが主旋律を弾いているが他の楽器は休んでいる。実際に手を動かしていないというだけで、自分の出番まで拍を数えているわけだから、ちょっと休憩というわけにはいかない。何小節か過ぎると第二バイオリンが先の第一バイオリンと同じ旋律を弾きはじめる。フーガである。同じ旋律が遅れて入っても違和感はなく調和の響きを感じる。すると次々に、あるいは同時にビオラ、オーボエ、フルート、チェロ、バス、チェンバロ、そして八声部の合唱が加わってくる。耳を澄ますと、もちろん主旋律はあるが、いろいろの楽器がそれぞれ独自の旋律を演奏している。当時は、演奏記号は余り多く使われないで、演奏者に任されていた部分が多かったらしい。それは作曲者の意図を忠実に表現しなければならないというのではな

く、演奏者がこう演奏したいという自己の必然性に支えられてされるような演奏の自由があったようだ。また単に自由というばかりでなく、他のパートの音も聴き合いながら和声的にも美しい響きを出していく。音楽は水平的に流れるところもあれば、垂直的に力強くあるところもある。そしてどれ一つのパートも欠かすわけにはいかない。つまり高音が優勢で低音が劣勢で、単に主旋律に合わせて和音を作っていくというわけでなく、自らの特徴を主張しながら音楽的個性を奏でる。そしてその個性や特徴を維持しながら全体の作用の中で、一つのまとまりある音楽が生れてきている。

さて、四月になると新しい子どもたちが入園してくる。私にとって、多くの場合初めて集団の中で過す経験をする子どもたちがどのように動きはじめるか、またそれがどのように変化していくのか大変興味がある。それはあたかも、静まりかえったホールで指揮者が棒を振り上げるのを待つ聴衆と同じ気持である。

いよいよ子どもたちが部屋に入ってくる。ヒデちゃんはお母さんにぴったりくっついて一ミリといえども離れようとしない。これから過す部屋や他の子どもたちが全く視界に入らないくらい、お母さんの腹の中にうずくまっている。一人で動き始めるのにどの位かかるであろうか。しかしまわりのようすは感じとっているみたいなので、全くの動きの休みではない。もしかすると、四分休符か、あるいはそれが数十小節続くかもしれない。シゲちゃんは、うって変って部屋に入るなり一目散に園庭に飛び出して走りまわっている。とにかく走りまわっている。マコちゃんは、お母さんのスカートのすそをしっかり握って部屋に入って来た。先生がオモチャを持って迎えるとすぐに興味を示し、いつのまにかすそから手が離れ、両手でオモチャで遊んでいる。タカちゃんはすぐトランポリンにのる。二、三度うまくいかないがすぐ上手に跳べるようになり、跳び続けている。先生が手を差し出しても見向きもしない。オモチャを出しても知らん顔、視線も合わない。しかし、何か生きがいでも見つけたかのように生き生きと跳び続けている。ミッちゃんは本だなを見つけ先生の手をとり椅子にすわらせる。そして本を読めとせがんでいる。ティーちゃんは部屋を一まわりした後、トイレに行く。先生がようすを見に行くが、どうも生理的要求現象ではないらしく、トイレのドアに興味が向いている。それを開けたり閉めたりしているうちに中に入り、ニコニコしている。ユウちゃ

んは水道の所へ行って水遊び。飛び出す水の感触が気持ちいいらしい。キャッキャッと喜んでいる。たまたま園庭を駆け回っていたシゲちゃんが部屋に駆け戻り、すぐ一緒に水遊びをしはじめる。

全く大人の手を借りずに自ら動き出し、楽しみを見いだしている子ども、大人の手を必要としながら動き出す子ども、すべて大人の手の中にある子ども、様々である。一人一人ようすの違う子どもたちは、自分なりにそれぞれ動いている。お母さんとベッタリのヒデちゃんも、心は動いている。動き出す準備をしている。一人一人の子どもの動きはその子どもの自らの主体によって独自に動いている。そうでありながら不調和ではなく、むしろ一つのまとまりとしてクラスの特徴を示していくのである。そしてそれは、子ども自ら興味をもって手をつけたり、動き出したりすることから自分自身の活動が生まれ、そこからその子どもの発達を期待することが出来るという考えを支えてくれる。

子どもたちの動きに華麗さや流麗さは見られない。しかしこのようすは私に先の音楽、つまり、ポリフォニックな音楽がそれを基としながらも、ホモフォニックな音楽に移りゆく時代の音楽を、そしてその演奏の始まりを感じさせる。素晴らしい演奏者である子どもたちが、自らを出し切って演奏出来る（動ける）かどうか、私がそれに十分応えることが出来るかどうかという不安と、今年は子どもたちによってどんな素晴らしい音楽が奏でられるのかという期待を抱く入園時である。

（愛育研究所家庭指導グループ）